

ナマズといえば「里・湖・川」どこにいる？



濃尾平野で「ナマズ」といえば、川のワンド、用水路、田んぼなど、少し濁った流れの緩やかなところで、ゆるゆる泳いでいる姿を想像されるのではないのでしょうか。ふつうナマズといえば、この「ナマズ」で、西日本を中心とした国内の広い範囲でみられます。日本の淡水魚のなかでは群を抜いて大きくなる種で、最大70cmほどに成長するその姿は里山生物の代表格といえるでしょう。

では、それ以外のナマズというと、「湖のナマズ」が挙げられます。濃尾平野からは近所にあたる琵琶湖・淀川水系では「ピワコオナマズ」や「イトコナマズ」がみられます。

ピワコオナマズはその名の通り、琵琶湖やその周辺にすむ日本一大きなナマズで、なんと体長 1m 以上になることもあります。ふだんは琵琶湖のなかでも水深数10mの深みで過ごし、初夏の頃になると、雨の降った後など、浅場に移動して産卵します（大きいのでパツパツパツととてもダイナミックです）。

イトコナマズのほうは、生活様式はピワコオナマズと似ていますが、見た目はイトコ（岩床）の名前の由来とおり、岩肌に似たまだら模様があり、岩がゴツゴツしているような場所にすんでいます。（ちなみに、とてもおいしいそうです。）

これまでのとおり、長らく、日本のナマズは里山や湖の緩流域にすむものと思われてきました。しかし近年、川（川の本流）をすみ場とするナマズが発見されました。その名も「タニガワナマズ」で、流れの早い、河川のやや上流域にみられます。イトコナマズに似たまだら模様があり、私（お魚コラム担当K）の印象では、ナマズよりも体がシュッとしているような気がします。

主な分布域は東海～中部地方とのことですので、ひょっとしたら、読者の方のなかには、知らずに見ていた方もいるかもしれません。（イトコナマズに似ているので、おいしいのではないかと期待しています。）

新たな発見により、日本の里山や湖、さらには河川の淡水生態系の頂点にいたことがわかってきたナマズのなかま。そこかしこでニルリンとした顔で君臨しているのかと思うと、水辺を眺めるたび、なんだかほのぼのとした気分になってしまいます。



facebookページはこちらからアクセス！
<https://www.facebook.com/kisosanseneconet/>



ニュース情報を募集しています！

木曾三川流域生態系ネットワーク推進協議会では、木曾三川流域におけるエコロジカル・ネットワーク形成に関連する地域の取り組み情報をニュースレターにまとめて発信しており、生物多様性の保全や生きものを活用した地域づくりなど、流域のフレッシュな情報を募集しています。下記お問い合わせ先まで情報をお寄せください。（なお、紙面の都合等で取材・掲載できない場合もありますこと、予めご了承ください。）

木曾三川流域生態系ネットワーク推進協議会（事務局：国土交通省木曾川上流河川事務所）とは、川とともに育まれてきた流域の自然や文化を保全・活用し、地域の魅力を向上させるとともに、人と自然・人と人との絆を深めることを目的とし、流域の自治体・河川管理者・有識者によって、平成26年度に設立されました。

本協議会では、木曾三川流域において、自然環境を保全・再生・創出につなげる「生態系ネットワーク形成」に関連する活動を行う（または賛同する）地域のさまざまな団体等に参加していただく「木曾三川流域エコネット応援団」を結成しています。応援団の皆さんの活動に関する情報共有等を図ることにより、地域の交流・協働を促進し、取り組みのさらなる発展を目指していきます。

「木曾三川流域生態系ネットワーク」ホームページ（<http://www.cbr.mlit.go.jp/kisojo/econet/index.html>）



木曾三川流域生態系ネットワーク推進協議会事務局：国土交通省 木曾川上流河川事務所 河川環境課（岐阜県岐阜市忠節町5-1）
 【問い合わせ先（R1事務局窓口）】 cbr-kisojo@mlit.go.jp / tel 058-251-1321 / fax 058-251-4301



◎本ニュースレターは、木曾三川流域におけるエコロジカル・ネットワーク形成に関連する地域の取り組み情報を発信するものです◎

■2020年1月11日（土）・12日（日）〔名古屋国際会議場〕 エコネット応援団の取り組みを世界に発信するために、 「あいち・なごや生物多様性 EXPO」に参加しました！

ちょうど 10 年前の 2010 年に名古屋市で行われた COP10 以降、さまざまな団体等による生物多様性保全の取り組み成果を共有・発信することを目的として、『あいち・なごや生物多様性 EXPO（主催：UNDB-J・環境省・愛知県・名古屋市）』が開催されました。

大人気のさかなクンの基調講演のほか、さまざまな催しがあり、当エコネット応援団もブースエリアに出展参加し、応援団の取り組み、また応援団参加団体の皆さんの活動成果をPRしてきました！



▲応援団ブースはとても賑わいました

▼一宮高校生物部作品の生きものスタンプは大人気



「生物多様性交流ひろば」は、ステージプログラム（生物多様性取組発表、生物多様性ミニ授業、和太鼓演奏等）が繰り広げられたメインステージの前に、ブースエリア、フードコート、写真展などが並び、連日、多くの来場者でにぎわいました。

ブースエリアは、およそ 75 の団体・学校・企業・行政機関等のブースが並び、ニホンウナギの人工繁殖を目指す高校生の発表があったり、愛知県内の海岸の砂粒の中からマイクロプラスチックを拾う体験ができたり、さまざまな感動・刺激がありました。

当ブースは、応援団参加団体の皆さんから提供いただいた約 30 枚のパネルのほか、イタセンバラやハリヨの繁殖動画、生きものスタンプなどの体験型作品などもたくさん並び、多くの方々に熱心に展示を見ていただくことができました。



▲木曾川の魚釣り体験（一宮市尾西歴史民俗資料館作品）は、ゴミや侵略的外来種を釣りあげて川をきれいにする遊びになっています



▲指標種との記念撮影パネルでイタセンバラ・ハリヨ・ニホンウナギをPRしました

■2020年1月25日(土)〔一宮市 尾西生涯学習センター墨会館〜木曽川現地〕

イタセンバラ保護 10 年の活動を振り返る 「イタセンバラの勉強会」の第 10 回記念大会が開催されました

国内3地域にのみ生息するイタセンバラのうち、木曽川水系における保護推進を図る木曽川水系イタセンバラ保護協議会主催の「イタセンバラの勉強会」の第10回記念大会が開催され、約40名の参加者が集いました。

はじめに、協議会長の森誠一先生(岐阜協立大学教授)より、この10年の振り返りと、今後ますますの保護推進に向けたおはなしがあり、その後、河川整備・保護増殖・地域活動等の各分野の専門家による取り組み報告がありました。最新技術・環境DNAを活用した研究(岐阜大学流域圏科学研究センター：永山滋也さん)に関する紹介があったり、イタセンバラ等のすむワンド環境整備を行った河川現場の視察もあり、参加者の皆さんは熱心に各報告を聞いていらっしゃいました。



▲子どもから大人まで多くの方が参加され、講演に熱心に聞き入っていらっしゃいました



◀左)会場には地元高校生のイタセンバラ保護活動のポスター展示や、イタセンバラのアクリル標本もありました

◀右)ワンド環境保全の現場視察として、木曽川河川敷を見学しました

■2019年11月29日(金)

〔一宮市起 木曽川河川敷〕

起小学校4年生の皆さんが 木曽川ワンドで環境学習を行いました

イタセンバラの飼育に取り組んでいる一宮市起小学校の皆さんが、木曽川ワンドを訪れ、川の自然に関する現地学習を行いました。

平成25年からほぼ毎年、4年生を対象に継続されている取り組みで、今年も、魚類調査(ギンブナ、ゼゼラ、タイリクバラタナゴなどを観察)や水質調査(CODを計測)を体験しました。

「家の近くの川にイタセンバラや外来種がいたなんてびっくり」「あまり生きている魚をみたことがないのでもいい体験」「水をよごさないよう気をつけたい」など、さまざまな感想が聞かれました。



▲この日は、一宮市尾西歴史民俗資料館の学芸員の方のおはなしもあり、木曽川起は、かつて水浴場だったことも伺いました。

第 20 回 中部の未来創造大賞 木曽川高校総合実務部の皆さんが 奨励賞を受賞されました

本年度で第20回を迎える「中部の未来創造大賞(中部の未来創造大賞推進協議会主催)」の受賞者が発表され、藤前干潟クリーン大作戦をはじめ、未来へつなげる地域づくりの活動が受賞されるなか、エコネット応援団に参加いただいている木曽川高校総合実務部(イタセンバラの保護につながる活動)が奨励賞を受賞されました。受賞理由は年間活動回数がとても多いことなど。

2月3日には校内で授賞式が行われ、生徒さんらは、取材に来られた新聞記者さんに「活動を認めてもらえてうれしい」と喜びを伝えていました。



▲イタセンバラ認知度向上のためのアンケート調査、河川敷のパトロール、ワンドの清掃活動などなど、休日もこつこつ活動をしている皆さん。ほんとうにおめでとうございました。

■2019年11月23日(土)〔海津市南濃町〕

里川の生きものを守るため、 今年も下池ビオトープの池干し体験が開催されました

かつて一帯に大きな池があったことから、いまでもさまざまな水生生物がみられる下池地域につくられた「下池ビオトープ」において、生態管理の一環として毎年行われている池干しを体験する行事が開催されました(下池西部まちづくり協議会、下池地域農地・水・環境保全管理組合、東海タナゴ研究会、西濃農林事務所による共催)。

ちょっと暑いくらいのよい天気で、参加した子どもたちは、泥だらけになって、池の水生生物の避難作業を手伝っていました(在来種は数日干し上げた池に再放流されるとのこと)。

採捕した生きものは、講師の北島さん(東海タナゴ研究会)に、見分け方や特徴などを教えてもらったり、池干しについて紙芝居で学んだり、楽しい体験会でした。

心配なのは、今年も特定外来生物オオクチバスが確認されたこと。何度も除去しているにも関わらず、何度もみつかるので、心無い人が放流しているのではと考えられるそうです(法律違反になります)。

こうしたお話を子どもたちも熱心に聞いており、楽しい体験会が、地域の自然を守る気持ちの醸成につながっていると感じました。



▲この日はコイやギンブナ、ヨシノボリ類のほかミズカマキリなどが採捕されました。特に多かったのはウシガエルのオタマジャクシ



▲とっても熱心に話を聞いていた参加者の皆さん。かつて下池地域に生息していたイタセンバラの話もありました

■2019年12月21日(土)〔岐阜市〕

岐阜市の金華山東麓に残る里山「達目洞(だちぼくぼら)」の保全活動

金華山東麓に残る里山「達目洞」の保全活動に参加させていただきました。ここは、岐阜市のヒメコウホネ特別保全地区に指定されていますが、コウホネの生育には、小川を含めた里山・田んぼが一体的に維持されることが重要とのことで、一旦放棄田となった田んぼを復活させた、米づくりも行われています。

金華山の西麓は、岐阜公園がある観光名所でも有名ですが、その裏側にこのようなうつくしい里山が残っていることは、あまり知られてないと思います。



▲枯れ草をあつめてたい肥化してます



▲小川の河岸の修理。石も土もこの里山から集めてます

主催は、達目洞自然の会で、岐阜大学の皆さん、岐阜大ESDクオリアさん、岐阜市環境保全課の方、流域で活動されている方など約20人が参加されました。

12月の活動は、来年に向けた冬支度として、刈り草の堆肥づくりと壊れた小川の河岸修理でしたが、苧草を集める作業は、枯れ草なので1つ1つは軽いのですが、集まると結構な重さに。10分も作業していると、汗びっしょりになり思わずTシャツになりました。

終わったあとは、会の方が、ここで採れたお米を、かまどを使って炊いてくださり、新米のご飯をごちそうになりました!美味しくいただきました。ありがとうございました。



▲作業後に頂いたかまど炊きのご飯